竜の物語

白黒金魚

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、女の子が謎の声に願いを叶えてもらってワンピースの世界へ旅立ちます。

主に盃兄弟を助けるために頑張るけれど、出来れば他のキャラとも仲良くなりたい主人公のお話

※ドラゴンクエスト８の呪文や種族など設定を少しお借りしてますが微妙に別物になると思います

※念のため警告タグをつけています

思いつくままに書いているのでちょこちょこ加筆修正していきます

目次

偉大なる航路と父親の存在
はじまりと出合い ―― 1
ようこそレッド・フォース号へ ―― 13
確認と思わぬ事実の判明 ―― 23
朝っぱらから大騒ぎ ―― 36

偉大なる航路と父親の存在

はじまりと出合い

目の前にはどこまでも広がる青い海、後ろを振り返ると鬱蒼と生い茂る森、上空を見上げればカモメが気持ちよさそうに飛んでいる。ぼんやりと景色を眺めていたけれど、頬を撫でる潮風にようやく意識がはっきりしてきたことで何故こんなところで座り込んでいたのかという疑問が浮かぶ。

なんでこんなとこに居るんだっけ？・・・たしか、私は自宅でのんびりとしてたはず。明日の大学の準備を終えて、ベッドの上にのって、お気に入りの音楽を聞きながら漫画を読んで・・・

??????????

「明日は金曜だから学校終わったら本屋にでもよってこうかなー。新刊出てたはずだから買いに行かないと」

本棚の中から一冊の漫画を取り出し、何度も読み返した表紙を開く。そこには麦わら帽子をかぶった少年が満面の笑みを浮かべている姿が描かれている。

『ワンピース』

モンキー・D・ルフィが海賊王を目指して海へ冒険の旅に出る物語。海兵や国に住む様々な人々だって素敵だと思うけれど、やっぱり一番憧れるのは海賊たちだ。ルフィ率いる麦わらの一味も、白ひげ海賊団も、少ししか出て来なかったけれど、赤髪海賊団も。

「みんな格好良すぎるよね。いーなー・・・ワンピースの世界とか行ってみたい。そんなこと出きるわけないんだけど・・・

少しくらい夢みてもいいよね。彼らと一緒に海に出て、冒険して、それから――」

本の中で、ルフィを抱きしめながら命を散らしていく彼の姿を撫でる。この結末だけは何度読み返したって納得なんか出来なくて、何度嘘ならいいなって思っただろう。
ワンピースは作り物の世界だ。登場人物たちだって本当に存在するわけじゃない。そんなこと分かってるのに、彼に惹かれている自分がいる。

《その願い叶えてやろうか？》
「え？」

突然、知らない声が聞こえた。今自宅には私一人しか居ないはずで、そもそも聞こえてきた声は聞き覚えのない声だ。
思わず立ち上がるが、その瞬間強い立ちくらみに襲われ、強く目をつむる。次に目を開いたら一面が真っ白な場所に立っていた。

「・・・いつの間に私の部屋は模様替えしたんだ」
さっきまで自宅のベッドでごろごろとしてたはずなのに、気づいたら見知らぬ場所にいるという状態に現実逃避したくなってくる。
《いきなり呼んだオレも悪いとは思うけどな、開口一番に出てくるセリフがそれか？》
またもや声が聞こえたが、辺りを見回しても白い空間が広がっているだけで誰も居ない。

「・・・幻聴？」
《幻聴でもないぞ》
「っ！さっきの声はあんた？」

どれだけ辺りを見回してもこの空間には私しか見当たらないけれど、声だけはこの場所で反響するようにあちらこちらから聞こえる。

《あぁ、オレだ》

「ここどこなの？」
《世界の狭間みたいなとこだな。詳しくは説明しても理解出来ないと思うぞ》
「なんか馬鹿にされてる？・・・まぁ、いいや。さっき私のことを呼んだって言ってたよね？なんで？」
《なんでって、願いを叶えてやろうか？って言っただろ》
「・・・願いを叶えてやるってどういう意味？」
《そのまんまの意味だよ。まぁオレが出来るのは、お前をワンピースの世界に送ることまでしかできないけどな》

いきなり願いを叶えてやるとか意味分かんないから聞いたのに。まず、ホントにそんなことが出来るの？そもそもなんで私の願いなんか叶えてくれるわけ？ワンピースの世界に行きたいなんて考えている人なんか他にも沢山いると思うんだけど・・・というかこの声だれ？

《おー、なんかぐるぐる考えてるみたいだな。利きたいことがあるなら、一個ずつ答えてった方がいいか？》
「出来ればそうしてくれると助かりまｓ――」
こいつ今、なんて言った？いや、私が考えてること口に出してただけか？
《いや、口に出してはいなかったな》
「・・・考えてること筒抜け？」
《考えていることっていうより、心の声が聞こえるって言った方が正しいかな》
反則かよ
「・・・で、なんで私なんかの願いなんかを叶えようなんて思ったの？」
よし、めんどくさいし聞かなかったことにしよ
《おい、面倒って、それ聞こえるって分かってて言ってるよな?!・・・まぁ、いいや。お前の願いを叶えてやるのは恩返しみたいなもんだ

よ》
「恩返しってあんたに何かした覚えないんだけど」
《お前が覚えてなかろうが関係ないな。オレがそうしたいからやってることだ・・・というか出来るかどうかは聞かなくていいのか？》
「さっきの心を読める発言聞いて、人間の類いじゃなさそうだなって思ったから信じてみることにした。ずっとワンピースの世界に行きたいって思ってたしね」
《・・・そういう素直なとこは相変わらずだな》

相変わらず？どういうことだろう。さっきも恩返しとか言ってたけど、昔から私のことを知ってた？

「ねぇ今の――」
《すまん》

どういうことなのか聞こうと思ったらいきなり謝られた。聞こえてきた声はとても申し訳なさそうに、けれどこれ以上は話せないという強い意思を感じさせて思わず口をつぐむ。

《さっきの質問の続きから答えるよ。口が滑ったオレが悪いんだが、オレがどういう存在なのか、どうしてお前のことを昔から知っているのか、それを話すことは出来ないんだ》
「なにそれ」
《お前をワンピースの世界へ送ったら、もう会うこともないだろうからあんまり気にすんな》
「・・・分かった」
《それから一度世界を渡ったらもう二度ともとの世界には戻れない。それでも行くか？》
「行くよ」
《そっか。お詫びと言っちゃーなんだが、色々オマケもつけといてやるよ。向こうの世界でも頑張れよ》

そんな声が聞こえたと思ったら視界が徐々にブラックアウトしていく。

呼ばれたのも突然だったけど返されるのも突然なんだ。声の主の名前くらい聞いたら教えてくれたかな

薄れていく意識の中思ったのはそんなことだった。

??????????

《くくっ、あそこで考えることがオレの名前かよ。そういうズレたとこも変わってなかったな。つい手ぇ出しちまったから、これ以上干渉することは出来ないが・・・今度こそ幸せになれよ――さん》

??????????

・・・あぁそうだ、なんでこんなところにいたのかようやく全部思い出した。あの声、いろいろ急過ぎるだろ。オマケってなんだよ。そこは詳しく説明しとこうよ。

急にとばされた影響かは知らないがまだ頭が働かないけれど、目の前に広がる海を見る限り本当にワンピースの世界に来たのだろう。たぶん。

いや、だって実感全くわかないし。こんな人の気配のない島じゃ、ほぼ確実に無人島だろう。無人島じゃ、ここがワンピースの世界かどうかなんて確かめようがない。・・・ん？

「まぁいいや。まずは島周辺から探索してみるか」

座り込んでいた身体を起こし立ち上がる。なにやら違和感を感じるが、それもいまは後回しにしとこう。
とりあえず食べる物と、船が欲しいな。人の住んでる島まで行ったらここが何処の海なのか聞きたいし。・・・あれ？船だけあっても航海術なんて持ってないから他の島とか行けない？

「・・・うん。深く考えないことにしよう・・・何とかなるでしょ。たぶん。」

島の回りを海沿いに歩いてみるけれど、たいしたモノはあまりない。唯一見つけたのは打ち上げられていた廃船だけだ。船として使うことは不可能なほどにボロボロになっていたが、ドクロの旗がついていたので、この船は海賊船だったのだろう。
海賊旗なんて始めてみた・・・ほんとにここはワンピースの世界なんだ。ようやく実感わいたかも。
あと見てないのは森の中だけかな。ちゃんと確かめないことには断定出来ないけど、やっぱりこの島は無人島で間違いなさそう。食べ物とかあるとすれば森の中なんだけど・・・行かないとダメかな。あの森、人はいなさそうなんだけど獣とか絶対いるよな。遭遇したらどうしよ・・・
迷っていても拉致が明かないので覚悟を決めて、鬱蒼と生い茂る木々を掻き分け進んでいく。足元はあちらこちらから木の根が飛び出しとても歩きづらい。しかし、足を引っ掻けることもなく、何処に何があるのか分かっているような感覚を頼りに進んでいく。

「それにしても島の回りも結構歩いたし、こんな場所歩き慣れてないんだからもっと疲れててもおかしくないよね？基本的にはインドアタイプだったからそんなに体力があるわけないんだけど・・・？」
私ってこんなに体力あったっけ？なんて蔦を払い、むき出しになっている木の根を踏みつけ、考え込んでいると背後に気配を感じて振り

返る。森の奥、数メートル先にある木々の陰になっている場所からこちらを見つめる大きな目と視線があった。

「・・・」

「・・・えっと・・・虎？」

「ガゥ」

のっそりと近づいてくるその姿は虎にそっくりなのだが、動物園なんかで見たことのある虎よりも3倍くらいはある。口から伸びる牙は人の腕ほどの太さはあるだろう。あまりの大きさにボケた質問してしまうが、虎が答えてくれるわけもない。爛々と輝く目と、口から漏れる涎に、虎が私を獲物として狙っていることが分かり顔がひきつる。

こいつ！私を喰う気だ！

突然遭遇した巨体な獣に私がとる選択肢は一択だ。視線はそらさず、虎から逃げる機会を伺いながら少しずつ後ろに下がる。一歩後ろに出した足が枝を踏んだらしく、ポキッっという音を合図に虎に背を向け全速力で森の中を駆ける。

「うわぁぁぁ!!」

「グルゥアァァ!!!」

空気を震わすような咆哮に鳥肌がたつが、少しでも足を止めたら虎の餌になるのは間違いない。木々の隙間を縫うように走っていると背後から追いかけてくる気配がする。いつの間にやら追いかけてくる存在が増えているような気がして、嫌な予感に背後をみると虎が2匹に増えている。

「ゲッ」

なんで増えてるの!?夫婦か何かですか!?

「あーもう！なんで私なんか追いかけてくるの!?そのうち戦えるようにはなりたいけど今の私にあれの相手は無理!!」
あんな巨大な虎、どうやって倒せばいいのか分からん！せめて鉄パイプとかないの!?

「メラ！とｋ――」
とか唱えたら火とか出てこないかな!?なんて続けようとした言葉は、背後に向かって飛んでいく火の玉に驚いて口から出てこない。
火の玉は虎には当たらず空に飛んでいったが、２匹とも警戒してか止まってくれたみたいだ。私の足も驚きのあまり止まっていたけれど・・・

い、まの何？え？火の玉が出てきた?!
「・・・もしかして呪文使える？」

やけくそ言った言葉が、ゲームの呪文のように火の玉が現れたことに驚いて固まってしまう。

「・・・メラゾーマ」
半信半疑確認で他の呪文を恐る恐る呟く。すると頭上高くに巨体な火の玉が作られていく。それはどんどん大きくなっていき、小さな太陽が出来たみたいだ。

ってそんなこと呑気に思ってる場合じゃないじゃん！やばいやばい！こんなの撃ったら森燃えるよ!!消えろ！お願いします消えて下さい！

予想外に大きくなっていく火に焦る。なんとか消そうと祈っているんだか、念じているんだか分からなくなるが、努力のかいがあって火の玉は少しずつちいさくなっていき、消すことが出来た。

「あ、はは・・・」
もはや、笑うしかない。こんな力、制御出来ずに暴走したら周囲が吹っ飛びそうだ。今回、辺りの木の天辺は黒く煤けてしまったが、虎たちもいつの間にやら追い払うことが出来たのでよしとしよう。・・・やり過ぎちゃったけど。

??????????

「おい！今のでっかい火の玉見たか!?」
「落ち着けお頭。恐らく悪魔の実の能力者だろ。あんな何もない島にいる理由は知らないが・・・まぁログは別の島を指してるんだ。わざわざ寄ることもな――――おい、まさか」
「ちょっと寄ってみようぜ！面白そうだ!!おい、お前ら上陸の準備だ!!」
「・・・はあ」
「諦めようぜ。あぁなったお頭は止まんねぇって。見てみろよあのキラキラした目を」
「・・・ふぅー、戦闘の準備もしておけよ」
「たぶん大丈夫だって！楽しみだなー」

??????????

これ以上獣が襲ってくることもなさそうなので、後回しにしていた違和感を確認していくことにした。あんまり考えたくなかったんだけど、放置しといて今回みたいに大事になったら嫌だし。
まずは、起き上がったときにあれ？って思ったんだよ。なんか目線が低いなって。虎に追いかけられてる時も身体能力上がってたせい

か、切羽詰まってたからか気がつかなかったんだけど。自分の身体を見下ろしたら一目瞭然だよね。・・・はい、縮んでました。鏡とかないから確認しずらいけど、たぶん7歳くらいだと思う。私には年の離れた妹と弟がいたんだけど、一番下の弟と同じくらいだから間違ってないはず・・・私の家族についてはまた今度ね。

あと、髪の毛の色が黒からミルクティーみたいな色になってた。いや、亜麻色とかの方が近いかな？もしかしたら瞳の色も変わってるかもしれない。

一番気になるのは声が言っていたオマケってやつ。ドラクエの呪文が使えたのは確実にそれが原因だと思うんだけど、何も教えてくれなかったから確かめようがない。他にも生き物の気配とか相手が襲ってきたりするのが分かるんだけど、これってもしかしなくても見聞色の覇気――――

そんなことを考えていたら、急にポンッという音がして紙がふってきた。

慌ててキャッチして覗いてみると、どうやらあの声からの手紙らしい。

『色々説明するの忘れてて悪かったな。気付いてるとは思うが、その身体はこっちで用意したものだ。オレが用意した身体（器）にお前（魂）が入ってる状態だな。身体の年齢は5歳。ちゃんと成長するから安心しな。基本的な能力は高いから頑張れば頑張るだけ強くなるぜ。すぐに死なれちゃ寝覚めが悪いから見聞色だけはすぐに使えるようにしといた。

オマケの方は、迷ったがお前がよく遊んでいたゲームの設定を借りることにした。竜神族っていただろ？人と竜の二つの姿をもつ種族。面白そうなんでそれをオマケにしてやった。ある程度の呪文も使えるからこれからに生かせ。

追伸　竜神族（オマケ）は悪魔の実の能力じゃないから海で溺れることはないぞ』

読み終わると手紙は音もなく消滅した。

「消えるんならそれも書いておいて欲しいかった。でもお陰で知りたいことは結構分かったな。この身体の年齢は5歳だったから、一気に15年も若返ったことか。にしてもオマケがまさかの竜神族・・・ドラクエ8かよ！いや確かによく遊んでたけどさ。何周もするくらい好きだったけど、ワンピースに来てまでドラクエが出てくるとは・・・まぁ、いっか。」

竜神族なら変身できるかな。竜の姿になれたら空とか飛べるかな？船探さなくていいし、練習してみようかな。呪文の方はもっと広いとこでやろう。せめて、翼だけでも出せないかなー。

目をつむり背中の肩甲骨あたりから翼が繋がっているイメージで身体を動かす。暫くうなっていると、なんともいえない感覚がして閉じていた目を開けると背中から翼が生えていた。

慣れるまでは大変そうだけど、ちゃんと思う通りに動かすことは出来そう

パタパタと羽ばたくように動く翼に思わずガッツポーズをとる。

「やった！」

「ちょっと待ってくれ！」

突然腕を掴まれて身体が固まる。

嘘、人の気配なんてしなかったのにいつの間にこの島に来たの!?うん。それより、こんなに近づかれるまで気づかなかった！

慌てて振り返り、私はもう一度固まった。振り替えってすぐ目の前に、それはもう目をキラキラと輝かせた男性の顔。年は20代くらいだろうが表情のせいでもっと若く感じる。なによりも驚いたのは赤い髪、顔に三本傷をもった男の顔には見覚えがあった。

「あ、赤髪のシャンクス～～!!!?」

ようこそレッド・フォース号へ

時間は少し遡り、突然現れた手紙を読んでいた頃。無人島の海辺に、竜を模した船頭の海賊船が上陸していた。船員たちが慌ただしく上陸準備をしているなか、シャンクスは接岸と共に船の甲板から砂浜に飛び降りる。

見聞色の覇気を使い島の様子を伺うと、この島のほとんどの生き物は、船の上陸した場所とは反対側集まっているようだ。そしてこの島から感じる人の気配は一人だけ。おそらくこの人物が例の現象の原因。

「一人だけ、か・・・それに、以外と近くに居るな」

「・・・わざわざ上陸までしたんだ。会いに行くつもり何だろうが、その後はどうするつもりだ?まさか、ただ見物に来たってわけじゃないよな」

「会ってから決める。見たとこ船は無さそうだし、面白そうな奴なら仲間に誘ってみるか。あっ!ベックはついてくんなよ。お前らもだぞ!」

いつの間にか隣にやってきた副船長と、背後の船員達に釘をさす。ついてくる気だったのか激しいブーイングの嵐と、何故かおれへの悪口が飛んでくる。というか悪口言ってる奴等、なんか妙に楽しそうっつうかなんつうか、おれ、お前らの船長だよな?

「あー・・・もう、うるせぇ!船長命令だ!ここで待機してろ!あとおれに対して童顔だのケチだの言ってきたやつ、後で覚悟してろよ!・・・ったく。誰が童顔だ!」

コンプレックス気味である顔のことを言われて若干へこむ。人が気にしてることを言いやがって・・・やはりこのままでは威厳にも関わるし何とかしたい。どうする?・・・いっそひげでも生やすか?

そんなことを考えながら、森へ向かって歩きだそうとしたら肩を掴まれ足を止める。

「待て！一人で行く気か⁉」
「なんだよ、お前もついてきたいってか？」
「ここは偉大なる航路（グランドライン）だ。この海で航海してるのならある程度名前が知られているはず。なのに、火を使う能力者なんて聞いたことがない。似たような能力を持ってるのは、白ひげのとこの不死鳥と、海軍中将のサカヅキくらいだが、恐らくそのどちらでもないだろう。そんな正体の知れない奴のところに船長だけで行かせられるか」
「・・・心配性だねぇ、うちの副船長は。大丈夫だって、悪い奴じゃねぇよ」
「根拠は？」
「勘」

言ったとたん、それはそれは大きなため息をつかれた。くわえていたタバコを口から離して、肺の中に溜まった煙りを深々と吐き出すその顔にはくっきりと疲労が刻まれている。こいつ早くに老けそうだな、なんて頭の片隅で考えながら、ベックマンを説得するため口を開く。――因みに、苦労をかけているその最もたる原因が自分（シャンクス）であるなどとは微塵も思ってない。

「今まで、こういう時のおれの勘が外れたことあったか？」
「・・・そこまでして一人で行きたがる理由はなんだ」
「あー・・・なんつうか、呼ばれてる感覚がするってだけなんだけどよ。気になるっていうか、知っている気がすんだよなぁ。・・・それに、戦闘になったからって、このおれがそんな簡単にやられると思うのか？」
腰に差したカットラスを鞘から少しだけ抜き、刃を見せつけるようにして、ニヤリと笑ってやる。
「・・・はぁーっ、勝手にしろ」
「んじゃ、ちょっくら行ってくる！」

ベックマンから了承をもぎとり、軽い足取りで森へ向かう。背後では、いつでも動くことが出来るようにしておけと、船員達に指示を出す声が聞こえてきて、小さく笑う。何かあったときすぐに出航できるよう、戦いが起こったときすぐ戦闘準備が出来るようにしておけと、そう指示をしたのだ。

勝手にしろと言った割にはちゃんとサポートしてくれるつもりらしい。

「・・・それにしても、こいつは・・・」

どうやら件の相手は先程から移動はしてないようだが、森から感じる気配に眉をひそめる。脳裏にちらつく影を振り払うように、気配のする方へ歩いていくと焦げた匂いを微かに感じた。この島にくる前にみた巨大な火の玉が原因だろうか？森へ着弾することなく消えていくのはこの目で見ているので、直接的な原因ではなくても、あれ以外にもこの森で火を使ったのかもしれない。

森の中を進み、辺りの木々が一部分だけ黒く炭のようになっている場所にたどり着く。大きな木の根元に、人影を確認して足を止める。地面に座り込んでいるのは、肩まで伸びる柔らかな色の髪、簡素なつくりの白いワンピースを見に纏った少女のようだ。こちらに背を向けなにやら唸っているが、背中から分かる小さな体、手足の短さは、誰かが保護して守ってやらなくてはいけない年齢の子供にしか見えない。

何故こんなところに居るのか、声をかけようと一歩踏み出そうとしたとき、突如少女の背中から服を突き破り何かが飛びだしてきたのを見て息をのむ。

それは蝙蝠の翼のような形をしていたけれど、翼の先から鋭くとびだした爪のような骨と、強靭そうな鱗から、蝙蝠ではない別の生き物なのだと分かる。

パタパタと、翼をはためかせてはしゃぐ姿は見ていてほっこりして

くるが、そのまま今にも飛んでいってしまいそうで、止まっていた足を慌てて動かし少女の腕を掴む。

「待ってくれ！」

いきなり腕を掴まれたのだから当たり前なのだが、振り返り、こぼれ落ちそうなほど開かれた目で、あんぐりと口をあける表情で、ビシリと効果音がつきそうなほどに固まった体で、全身で驚きを表す少女に思わず笑ってしまう。

「あ、赤髪のシャンクス～～!!!?」

ただでさえ大きな瞳を目一杯に開く少女は、どうやらおれのことを知っているようだ。

なんか、この感じなつかしいなー。

「なぁ、お前の名前なんていうんだ？」

??????????

振り返ったら目の前にイケメンのどアップとか、心臓止まるかと思った。しかもそれがあのシャンクスだと!?なんでこんなとこにいるの!?

「なぁ、お前名前なんていうんだ？」

「えっと・・・リオンです」

いきなり名前を聞かれたので答えようとするが、あることに気付き口を閉じる。

向こうの世界で呼ばれていた名前をそのまま名乗ると、ワノ国の人物だと間違えられるかもしれないと思ったのだ。

最新刊まで漫画は呼んでいたので、ゾウで判明した、ワノ国の将軍が海賊王の船に乗っていたことがあったというのも知っている。そして、シャンクスはその海賊王の船に見習いとして乗っていたのだ。下手なことを言って怪しまれるのも嫌だ。なので下の名前だけ名乗ることにした。

もう使うことのないだろう名前に心の中で別れをつげる。

「リオンだな。知ってるみたいだが、おれはシャンクスだ。・・・ってなんだ、そんなに凝視してきて」

「・・・・なんか、若い？」

この男が赤髪のシャンクスであることは間違いない。けれど、何かが違う。違いをさがすように相手の全身をくまなく見て、気付いたのは自分が知っている姿よりも若いということだ。

流石に２０代にはなっているだろうが、一歩間違えれば１０代後半にも見えそうな顔。なにより、私の腕を掴んでいる手はルフィを庇い無くしたはず。それが存在しているということは、今が原作開始よりも前の時代にいるということだろう。

ひげがないだけで随分と幼く見えるな、とか思ってたら、シャンクスが何故か暗く影を背負っていることに気付く。ズーンと効果音が聞こえてきそうな様子にどうしたのかと、近づくとシャンクスはブツブツと小さな声で何事かを呟いている。

「こんな子供にまで言われるなんて・・・」

「なんか、ごめんなさい・・・大丈夫？」

「あぁ、もう大丈夫だ。とりあえず、おれはひげをはやすことに決め

た！・・・・で」
「？」
彼の中で一段落ついたのか、気持ちを切り替えたのか。先程までの影はどこへいったのやら、ワクワクと効果音が聞こえてきそうな笑顔で迫ってきた。
「その背中の翼は悪魔の実の能力か？動物系っぽいけど、変化してるのは翼と耳だけだな。ここに来るとき巨大な火の玉を見たんだがあれはお前の能力か？この島に船は無さそうだったが飛んでここに来たのか？それとも遭難でもしたか？まさかお前みたいなガキが一人で旅してるんじゃないだろうな？ほ――」
「あ、ちょ、っ・・・ま、待って。一旦ストップ！」
弾丸のように流れる質問に答える暇さえない。好奇心のままにいつまでも喋っていそうで、慌てて相手の口を手で塞ぐ。
「そんな一気に質問されても答えらんない！」
「ぷはっ！はっはっはっ、悪かったな。つい」
「悪いとか絶対思ってなさそう！」
「あっはっはっはっ、イテッ、叩くなって。いや、悪かった。１個ずつ聞くって。・・・一体、この島にはどうやって来たんだ？近くに人の住む島はないからこの辺りの住人じゃないよな」
「知らない。気付いたらこの島にいたから。シャンクス、さんは、なんで此処に来たの？」
「呼び捨てでいいぞ。・・・そうか。それなら海軍の支部がある島まで送ってやるよ。海軍なら住んでた場所まで送り届けてくれるはずだ」
「もう住んでた場所には帰れないからいいよ。海軍というか、世界政府あんまり好きじゃないし」
「・・・行く当てがないならおれの船に乗って行かないか？行きたい

とこあるっていうんなら連れてってやるよ」
「・・・なんでそんなことしてくれるの？」
「面白い奴だなと思ってよ。他にも色々と聞きたいことが出来たんだが、船ならゆっくり出来るだろ。あと、ここでのんびりしてると小言のうるさいやつが居るんだよ」
「えー、乗せてくれるのは嬉しいけど・・・というか赤髪は子供は船に乗せないって聞いたんだけど」
「どこで聞いたんだ？そんなこと。確かにガキは船に乗せないが、今回は特別だな。他に、船に乗れない理由でもあるのか？」
「特にないけど――って、きゃあ！」

よく知らない人を乗せていいのか聞こうとしたら、突如浮遊感に襲われる。ジタバタと暴れてみるけれど、小脇に抱えられ、がっしりとホールドされていてびくともしない。

「ないなら問題ないな」
「問題ある！私の意思は?!」

確かに、赤髪海賊団とかと一緒に航海してみたいなとは思ってたけど、いきなりすぎて心の準備ができてない！

「海賊が怖いってわけでも、急ぎの用事があるわけでもなさそうだから別にいいだろ」
「強引！」
「おれは海賊だからな！」
「あぁぁもうっ！よろしくお願いします!!」
「任せとけ！あ、その翼しまえるか？そいつについても船で詳しく聞かせてもらうぜ」
「・・・はーい」

最早、何を言っても無駄そう。それに、赤髪海賊団なら知らない海

賊なんかより信用できる。おそらく船の泊めてある方へ向かうシャンクスに、諦めて大人しく連れて行かれることにする。

森を抜けて海へ出てくると大きな船が泊まっていた。船には竜を模した船首に、三本傷のドクロと2本の剣が描かれた海賊旗。
ほとんどの船員は船の甲板にいるみたいだけど、ベン・ベックマンやヤソップ、ラッキー・ルウ、他にも幹部だと思われる人達だけ陸で待機している。そして、ベン・ベックマンはこちらを睨むように見ていて思わず頬がひきつる。

「ね、ねぇ。あの人、無茶苦茶睨んできてるけど大丈夫なの？」
「あー・・・あれは、睨んでるわけじゃねぇよ。別に怒ってはないから大丈夫だ」
「ほんとに？」
「・・・たぶん」

そこは自信をもって断言してほしかった。

??????????

「お、帰ってきたな。お頭。ところで、小脇に抱えてんのはいったいなんだ？」
「今回の戦利品ってとこだな」

森から出てきたお頭に近づいていき、真っ先に声をかけたヤソップ

は早速疑問を投げ掛ける。
腕の中の少女は、森から出てきたときは大人しくしていたのに、戦利品という言葉に抗議しているのか、手足をバタつかせて暴れている。一生懸命怒っているのは良く分かるのだが、お頭は全て笑って流しているため全く相手にされていない。その姿に、自分の息子もこのぐらいの年頃まで育っているたろうと思いだし、子供を助けてあげることにする。

「おいおい、あんま苛めてやんなって。嬢ちゃん大丈夫か？お頭は、副船長に説明頼む。」

お頭から少女を奪いとり地面に下ろしてやる。ついでに、我らの副船長を指差してやると、途端に嫌そうな顔になる。

気持ちはわからんでもない。けど、全てお頭が悪いから早めになんとかしてくれ。

先程から船の前を一歩も動かずタバコを吹かす姿は、全身から刺々しいオーラを出していて近づき難い。しぶしぶ副船長に向かっていくお頭を横目に、少女へ視線を移す。

「ところで、嬢ちゃんはどっから来たんだ？」
「ごめんなさい、分からないです。気付いたらこの島にいて。あの、ここはどこですか？」
「まじか。ここは偉大なる航路（グランドライン）だぜ。よく無事だったな。いや、かすり傷が多いな。どうしたんだ、これ」
「これはたぶん、虎から逃げてたときに引っかけたんだと思う」
「虎って・・・あのでっかい火の玉、それが原因か？」
「あ――」
おーい！リオン、ちょっとこっち来い！
「！あの」

「大丈夫だから。行ってこい」
「はい！」
お頭のいる方へ元気に走りっていく姿に苦笑がうかぶ。さて、これからどうなるかねぇ。

??????????

シャンクスの居る所に行くと、隣のベックマンと目があい、思わずお辞儀する。
遠くから見たときは怖い顔をしてたけど、今は呆れたような顔になってる。原作よりも前だからか、まだシャンクスに振り回されてるみたい。あと数年したらシャンクスの手綱をしっかり握ってるんだろうなー。

「来たな。うちの航海士が、嵐がきそうな天気だっていうんですぐ出航する。忘れ物とかないか？」
「大丈夫」
「よし。おれの隣に居るのがベックマンだ。悪いが、こいつに案内してもらった部屋で待っててくれ。船に乗れ、出航するぞ！野郎ども!!」
「「「おぉー!!!」」」

確認と思わぬ事実の判明

挨拶もそこそこに案内された場所は、寝台と小さな机と椅子が置いてある一室だった。小窓があるので外の景色が見える。ベックマンは、人を寄越すからそれまで待っていろとだけ言い残し何処かへ行ってしまった。鍵などをかけていった様子もなく、この部屋を出ようと思えば簡単に出ていくことは出来そうだが、待っていろと言われた言葉を無視してまで抜け出そうとは思わない。小さくなった身体では寝台の上に乗るのも大変だなぁなんて思いながら寝台によじ登り、誰かが来るのを待つことにする。

それにしても、これからどうしようかな。運良く?赤髪海賊団の船に乗せてもらえることになったけど、何時までもこの船に居候出来るとは思えないし。・・・後で、シャンクスにその辺り聞いておこう。長く居れそうなら、覇気とか戦い方とか教えて欲しいとお願いしてみようかな。この世界では力は有れば有るだけ生存率が上がる。それに自分が成したいと思っていることを考えると、早いうちから鍛えた方がいいに決まっている。あとは

「今が、いつなのかも、確認しなく、ちゃ・・・」

寝台の上で考えをまとめていると、段々と瞼が重くなっていく。今まで体験したことのない出来事が1度に起こりすぎて予想以上に疲れていたようだ。リオンは襲いくる眠気に勝てず意識を手放した。

「―い、―――起きろ。メシ食いにいくぞ」

「んん。ぅう―?」

ゆさゆさと体を揺すられ、いつもより硬いベットにぐずりながら

ゆっくりと開いた視界に入ったのは鮮やかな赤。

「・・・あれ？」

いつの間にか横になっていた体を起こす。目の前には赤い髪の男がこちらを覗きこんでいた。

「起きたか？もう夜だぞ」

「赤髪のシャンクス？――え？夜!?」

寝起きのせいかぼやけた頭が、一気に覚める。船に乗ったのが、太陽の位置からしておそらく昼過ぎあたりだったはず。しかし、窓から見える空は深い闇に覆われている。

「まじか」

「ぐっすり寝てたからなぁ。無理に起こす必要もねぇかっつうことでそのまま寝かしといたんだが、そろそろメシの時間だから呼びに来た。とりあえず今日は食堂で食うぞ」

今日はという言葉に引っ掛かりを覚えるが、それよりも食事という言葉に空腹を思い出したのか、ぐぅぅとお腹が鳴る。あまりにもタイミング良く鳴ったものだから、羞恥に顔が赤くなっていくのが自分でも分かった。聞かれただろうかとシャンクスの方へ視線を向けると、笑いを堪えきれないのか震えている。

「ぶはっ！だーはっはっはっ!!くくっ、い、いい音、した、な。くくっ、そんなに腹減ってたのか。いやー、もっと早く起こしてやりゃあよかったな」

「～～っ!!もう！そんなに笑わなくたっていいじゃん！ほら、早く食堂連れてって！」

「あっはっはっはっ！顔真っ赤にして林檎みたいになってるぞ！連

れてってやるから落ち着けって」

ぐしゃっと私の頭をかき回して、部屋を出て歩き出すシャンクスに慌ててついていく。落ち着けと言うわりには愉快そうに歪む顔は正直煽られいるとしか思えない。文句を言いたいけれど、何を言ってもシャンクスを喜ばせるだけのような気がして、結局何も言えなくなってしまう。

この後、リオンは食堂に向かう途中で転けた為、抱き抱えられて運ばれることになるのだが、収まった顔色がまた赤くなったことをシャンクスにからかわれて、抑えていた文句が飛び出すのも、全て笑って流されることになるのは余談である。

ドアを開けると同時に飛び込んできた光景に唖然とする。かなり広さのある空間には沢山の机と椅子が並べてあり、奥にはキッチンらしき場所も見えるのでここが食堂だろう。

「ついたぞ。食べるものはおれが持っていってやるから、リオンはベック、あー、お前を部屋まで案内したヤツの近くに座って待ってろ」

示されたのは、周りの喧騒から切り離されたような静かな一角。壁際の席に座っているベン・ベックマンが居る場所だった。身体がもう少し大きければ自分で取りに行くと言っていたが、目の前の景色と先程転けたことも考えると大人しく言うことを聞いたほうがいいだろう。

シャンクスの言葉に頷くと床に下ろされる。いい子だ、と私の頭を軽く撫でると奥にあるキッチンへ向かって行く。慣れているかのようにひょいひょい進む姿に今後の船での食事が心配になってくる。いやな予感を振り払うように頭を振り、ベックマンの処に早足で向かう。

なんと声をかけていいのか分からず、軽く服の裾を引っ張り、あの、と呼び掛けてみる。

「?・あぁ、起きたのか。とりあえず座ってろ、お頭もすぐ来るだろ」

軽く辺りを見回し食堂の状況とキッチン前にいるシャンクスの姿を確認すると何をしているのか把握したのか、さっと持ち上げられ隣に座らされる。

「わっ!・ありがとうございます」

「気にするな。・・・それから、後回しになったが、食事が済んだ後、船長室に来い。お前のことを色々聞かせて貰う。何も分からない相手を船の中で野放しにするわけにはいかないからな」

そう言って、元々いいとは言えない目付きを更に鋭くして私を睨みつる。身体中を刺すような空気に、分かっていたつもりだけれど、改めてここは海賊船なのだと知らされたようで表情が強ばる。肌があわ立つってこういう事なんだな、なんて少しずれたことが頭をよぎる。

ここで恐いと、逃げることはいつでも出来る。けれど逃げる為にこの世界へとやって来たわけではないのだ。深呼吸をして怯む気持ちを立て直し、相手の目を強く見つめ返し、返事をする。

「はい。分かりました」

「・・・ふっ、いい返事だ。悪かったな、試すような真似をして。お頭が大丈夫だと判断して船に乗せたんだ、悪いようにはしないさ。ただ、流石に何もしないで自由にさせるわけにはいかないからな。確認の為にいくつか質問するだけだ」

表情を和らげて告げられる言葉に安堵の息をはく。チビのくせに案外根性あるじゃねぇか、そう言って頭をポンポンと撫でられる。

シャンクスといいベックマンといいなんで撫でてくるんだろ。

「確かになぁ。あの凶悪な面見て、真っ正面から向かい合うなんて大人でもそうそう出来るもんじゃねぇぞ」

突如聞こえた声に顔をそちらに向けると、ほれお前の、と料理を運んできたシャンクスが、私の前に食器を置き、対面の椅子に座るところだった。

いつから居たのか分からないが途中からベックマンとのやり取りを見ていたのだろう。

「おれもあの顔のときのベックには近寄りたくねぇのに、こいつ、おれを見かけるとと追いかけてきやがるんだよ」

「それはあんたが書類を忘れたり、厄介事を持ってくるからだ」

「あんな顔で追いかけられたら逃げたくもなる」

最早開き直っているシャンクスに諦めたのか、深々とため息をつくベックマンには同情するしかない。

「なんだ、まだ食ってなかったのか。腹減ってんだろ。コックがいきなりガッツリしたもん食わす訳にはいかねぇってんで、スープとパンしか貰ってこなかったが、足りないなら肉とか持ってくるか？」

このやり取りは今に始まったかことではないのか、それともシャンクスが全く気にしない性格なだけなのか—後者の可能性の方が高そうだ—二人のやり取りに気を取られて、手付かずのままだった食事に気づいたシャンクスが何故か世話を焼き出す。

ロールパンのようなパンをちぎっては私の口へ運び、咀嚼して飲み込むと今度は、スープをすくったスプーンを持ち上げては私の口へ運ぶ。あまりにも自然に差し出されたので何も考えずに口を開いたせいで、餌付けされる雛のように食べても食べても次が差し出される。

「も、もう大丈夫だから」

だんだん恥ずかしくなってきてシャンクスの手を抑えて、もう要らないと伝える。

「あ?・まだたいして食ってねぇだろ。ガキが遠慮なんかするもんじゃねぇぞ」

遠慮とかそういう問題じゃないんです!・恥ずかしくて食事どころじゃないので止めてください!!ｅｔｃ・・・

どう言えば納得してもらえるか考えていると思わぬ所から助け船がはいる。

「お頭、あまり構いすぎると嫌われるぞ。そのくらいにしといてやれ」

「なにぃ!・嫌いになるのか!!?」

「え、別に嫌いになるほどではないけど、食事くらい一人で出来るからさっきみたいなのは止めて欲しい、です」

「そ、そうか」

過剰に驚いたり落ち込んだりして忙しないシャンクスの姿に、これ以上何か言って面倒なことになるのも嫌なので放置することにする。

「お頭が復活する前に食べきっとけ。どうせ時間が経てば騒ぎだすのは眼に見えてる」

「はーい」

ベックマンの声からは面倒くさいという感情がありありと伝わってくる。付き合いの長い人物がそう言うのだ。目の前の食事を一刻も早く胃の中に納めるべく手を動かす。

食事も終わり、駄々をこねるシャンクスをベックマンが無理矢理引っ張って、ついでに私はシャンクスに抱き抱えられて連れてこられた船長室。

「ねぇ、シャンクス」
「ん？なんだ」

呼び掛ければニコニコと答えてくれるけれど、今の私の状態は、部屋に着いても離してくれずに椅子に座ったシャンクスの膝の上に座られている。

「下ろしてくれたりは」
「却下」
「えー」

そもそも何故こんなにスキンシップ過多なのかが分からない。知り合って1日も経っていない。会話をしたのは数時間程度のはずなのに、なんでこんなに友好度が高いんだろう。ガッチリと抱えている腕から自力で抜け出すことが出来そうにないので、ベックマンに視線で助けを求めてみる。

「諦めろ」
「・・・そうします」

ばっさりと切り捨てられる。何より目が何を言っても無駄だと語っているのを見て諦めざる負えなかった。

「ちゃんと名乗ってなかったな。ベン・ベックマンだ」
「リオンです」

「それで、お頭。リオンはいつまで船に乗せるんだ？こいつの故郷にまで送り届けるのか？」

聞かれた質問にあれ？っと首をかしげる。振り返りシャンクスを見ると、何を言わんとしているのか分かったのだろう。ひとつ頷いて答えてくれる。

「そういや、こいつらにはお前を船に乗せるとしか言ってねぇや」

「なんも話してないの？あ、でも、いつまでも船に居ていいのか私も聞きたい」

「どういうことだ？俺はてっきり迷子の子供を助ける為に船に乗せたんだと思ってたんだが」

話の流れが読めないのかベックマンが聞き返してくる。それにしても迷子って・・・。今まで道に迷ったことなんてなかったので、密かにダメージを受けている私をよそに、話は進む。

「おれが人助けなんてするようなガラかよ」

「見知らぬ相手ならともかく、気に入った奴なら別だろ」

そんだけ構い倒しているのだから、と副生音が聞こえる気がする。なんでこんなことになってるのかは私も謎です。なんて考えていたら、シャンクスはとんでもない爆弾を落としてくれた。

「まぁ、こいつに関してはなぁ・・・。知り合いっつうか、おれが惚れた女の娘だし」

「「・・・はあぁ!!?」」

副船長と一緒に声を張り上げてしまったのも無理はないと思う。

「どういうことだ！というかいつの話だ!!リオンはあんたの子供っ

てことか!!?」

ベックマンがシャンクスの肩を鷲掴みガクガクと揺さぶる。

「おれの子供じゃねぇよ!あー、ロジャー船長が処刑されるときローグタウンで会ったっきりだから、だいたい10年近く前のことだな。あの時から噂話すらぱたりと止んじまって、どうしてるか気になってはいたんだが」

「私がその人の娘だって思うのはなんで?始めて会ったときは私のこと、知らなかったよね?」

赤髪のシャンクスにそんな人が居たことにも驚くけれど、元々私は別の世界からやって来たわけで。鏡で確認したわけではないからはっきりとは言えないけれど、姿や顔も変わっているだろうことを考えると誰か別の人と間違えているのではないだろうか。

「リオンのことを見たときは少し懐かしいなと思っただけだったんだが、昔、お前と同じような力と、特徴的な耳を持ってるやつが居たのを思いだしてな。お前、竜神族だろ?」

「!」

「竜神族?」

シャンクスがその言葉を知っているとは思わなくてびっくりしていると、ベックマンがなんだそれはと聞いてくる。

「全身竜になる必要はない。おれと会ったときみたいに翼だけでも出せるか?」

頷くと、膝からは降ろしてはくれなかったが背中に空間をつくってくれたので翼を広げる。背中が開いているデザインのワンピースじゃなかったら服破れてたのかな。

「あいつから聞いたことがある。竜と人、二つの姿をもつ種族が、大昔に戦いに敗れて別の世界に隠れて住んでいたっていう話をな。それから、竜神族で生きているのは、もうあいつだけだっていうのも」
「随分とおとぎ話みたいな話だが、悪魔の実の能力者ではないのか？」
「違うな。確かに動物系の幻獣種なら似たような実があるのかもしれないが、あいつは海を普通に泳いでたぜ。気になるなら海楼石の錠があったろ。あれ持って来い」

疑うというよりは自分で確認しないと納得できないのだろう。ベックマンは、海楼石の錠を取りに部屋を出て行った。シャンクスが話してくれた話はドラクエ８の設定と同じものだった。なら、その人も私と同じ世界の人なんだろうか？

「だから・・・」
「ん？」
「私が竜神族だから、その人の娘だと思ったの？」
「いや。お前を見てたらよくわかる。顔もそっくりだが、仕草も、表情もよく似てるよ」

あまりにも優しい表情で語るシャンクスの姿は、漫画では見たことがない顔をしていて思わず手をのばす。

「どーした」

顔に近づける手を、避けることなく居てくれるシャンクスの頬にそっと触れる。肌から伝わる温もりに、生きているんだな、なんて当たり前なことを感じる。本の無機質な感覚とは違うことが嬉しくて、話すつもりはなかったけれど、此処が漫画であったことは誰にも話さないようにしようと決意する。

「ふふっ、何でもない。でも、な―」
「持ってきたぞ」
気になることがあったので聞こうと思ったら、扉が開いてベックマンが帰ってきた。
「で？」
「・・・え？」
「何が聞きたかったんだ？」
構わず続けろということですか。
「お母さんのことは何も聞かないのかなーと思っただけなんだけど」
元の世界に居るはずの家族のことは何故かぼんやりとしか思い出せず、この世界の母親らしい人については全く分からない為、答えようがないので聞かれても困るけれど、そこが不思議だった
「確かに。狙ったら自分のものにするまでしつこいお頭が、１０年近く片思いなんてらしくないもん引きずってるんだ。何もしないというのは変だな」
「おい、お前はおれのことを何だと思ってるんだ。リオンほとんど記憶ないだろ」
「なんで・・・」
「おれから話せるのは、竜神族っていう種族のことと、自分の娘を頼むって言われたことくらいか？あとは、『娘には、親について等、記憶に封印を施しておくからあとは任せた！』とか言ってたな」
「おいおい」

ベックマンが呆れたように呟いているのが聞こえたが、感想としては私も似たようなものだろう。

「ま、あいつについてはいいんだ。海楼石持ってきたんだろ。さっさと試して今日はお終いだ」

「お終いって、この後なんかあったか？いつもこの時間は酒飲んでるだけだろ」

「子供は寝る時間だろ」

「え、私まだ起きてられるけど」

「ダメだ」

折れる様子のないシャンクスに、ベックマンは手早く用事を済ませてこの場を去ることにする。リオンに海楼石を触れさせ、力が抜ける様子がないことを確認すると、おやすみ、と声をかけて部屋から出ていった。

「今日は一緒に寝るか」

私はどうすればいいのかと途方にくれていたら、言われた言葉にフリーズする。

「結構です！食堂行く前にいた部屋に帰してください！」

「はっはっはっ！断る！諦めて寝るぞ」

「うぅ、なんでこんなことにぃ」

抱き抱えられ、先程まで居た部屋の奥に連れていかれる。・・・どうでもよ、くはないな。シャンクスといると抱き抱えられて運ばれるのをなんとかしたい。

部屋の奥にある寝台の上に私を降ろし、シャンクスも寝転がる。ここまで来てしまうと抵抗しようとする気もなくなる。目を閉じて眠

気が訪れるのを待っていると、隣で身じろぐ気配がした。

「いつまで船に居ていいのかってお前は聞いたけどな」

「うん」

聞こえてきた声は固く真面目な話なのだろうと、目を開け返事をする。

「リオンさえ良いなら、おれ自身はお前のことを娘として接していきたいと思っている」

「それは・・・」

「無理強いするつもりはない。ただ、おれに遠慮する必要はないし、この船にも好きなだけ居ればいいと伝えたかっただけだ」

「うん。ありがとうございます」

「とりあえず明日は、知り合いの娘ってことで船のやつらには紹介しようと思う。寝ようとしてるところに声を掛けて悪かったな、おやすみ」

「話してくれて嬉しかったです。おやすみなさい」

朝っぱらから大騒ぎ

次の日、日が登り夜が明けきるころからリオンは疲労感に襲われつつも、今日のエネルギーを補給するために朝食をとっていた。

なんで朝っぱらからなんでこんなに疲れてるんだろ。もう全部シャンクスのせいだよ。次からは何言われてもシャンクスと同じ場所では寝ないようにしようかな。

昨晩の言葉はとても嬉しかったけれど、今日のように遊ばれてはたまらない。それに見た目は子供だが、リオンには２０才だった頃の記憶もあるので、男性と一緒に寝るのは抵抗があるというか緊張するのだ。まぁ、今疲労感に襲われている理由は別のことが原因なのだが。

昨日と同じように抱えられて連れて来られた食堂の一角。一人朝食をとるリオンの後方では、低めの声でベックマンがシャンクスを説教している。視界の端で、食堂にやって来た船員たちがまたか、という目を向けて素通りしていくのが見えた。誰も驚いた様子がない・・・いや、一部思いっきり笑い転げている者達もいるが、赤髪海賊団では特に珍しい光景ではないのだろうか？

「よう、嬢ちゃん。ちっちゃいのにキレイに食べるんだな」

そんなことを考えながら、リオンが食事を続けていると見覚えのある人物が声を掛けてきた。キレイに食べるというのは、この歳でスプーンやフォークを使い、食べ物を溢さずに一人で食事が出来ているからだろうか？

因みに、厨房のコック達からもらった今日の朝食は、柔らかい丸パンとスクランブルエッグ、ベーコンとサラダだ。量も考えてくれたのか、成人男性が食べるのには少ないけれど今のリオンにはちょうどい

い量が皿の上に乗っかっている。

「?あ、船に乗るときに会った」

「ヤソップだ」

「リオンです。しばらくこの海賊団でお世話になることになりました、よろしくお願いします。それから、ちっちゃいは余計です!」

「ははっ、それは悪かったな。お前さんについてはある程度副船長から聞いてるぜ。よろしくな。俺にもリオンと同じくらいの倅がいるから世話を任されたんで、なんか手伝おうかと思って近づいたんだが・・・お前さんには必要なさそうだな。で、お頭は今回、何やらかしたんだ?」

そりゃあ中身は成人してますから、なんて心の中で言い訳じみた言葉が浮かぶが口に出すような真似はしない。

「やらかした?」

「副船長に説教されてるだろ」

「ああ、あれですか。真っ先にシャンクスがやらかしたとか聞いてくるあたり、やっぱり頻繁に起こってるんだ。この光景」

気になったことを聞いてみると、ヤソップは視線を1度シャンクス達に向ける。

「まぁ、珍しくもない光景だな」

「なんか簡単に想像つくのもどうなんだろ・・・。説教の原因だっけ。えっとね、始めは狸寝入りしてたことについてだったんだけど、今は・・・普段の生活がだらしないとか、書類を溜め込むこととか、めんどくさいことを押し付けて逃げるなとか、段々日頃の不満の話かな?になってきてるね」

リ???????????

元々リオンの寝起きはあまり良くない。低血圧のため目を覚ました後もしばらくぼーっとしている時間が長い。今日も寝起きに愚図るように寝返りをしようとして違和感を感じ目を開く。するとシャンクスの腕がリオンの身体を抑えていて、身動き出来ない状態になっていることに気がついた。自力で抜け出すことも出来ず、声を掛けても起きる気配のないシャンクスに困り果てて居るところに、ベックマンが様子を見にやって来てくれたおかげで腕の中から抜け出すことが出来た。

ベックマンが言うには、リオンが起きたときにはシャンクスも目が覚めていたらしい。だから、抜け出そうとするリオンを逃がさないように腕に力を込め、呼び掛けても反応しないで目を閉じた状態のまま私の様子を楽しんでいたそうだ。

ベックマンに助けを求めたのは、シャンクスの腕の中から出ることを手伝ってくれれば良かっただけなのだが、ベックマンは容赦がなかった。

彼は声を掛けられても起きる気配のないシャンクスに溜め息をつくと、握り締めた拳で勢いよく頭を殴る。鈍く響く打撃音はなかなかの威力が込められていたようで、シャンクスは文字通り飛び上がる。

「っうぉ、おま、本気で殴っただろ!?痛ってぇじゃねぇか!!」

「はぁー。声を掛けてんのに寝た振りなんぞしてるからだ。さっさと起きてくれりゃあ、俺も実力行使なんざしねぇよ」

「ネ、寝タ振リトハ一体ナンノコトカ分カラナイナァ」

「おいおい、そんなんで誤魔化されると思うなよ。だいたい普段から―」

「そ、そうだ!リオン腹空いてるだろ?な?子供が腹空かせたままなのは良くないもんなよし早く食堂に行かないと!」

シャンクスが飛び上がったときにリオンの拘束は解かれている。なので、後は二人の話し合い（）が一段落つくまでどのくらいかかるかな、なんて他人事を決め込んでいたら突如シャンクスによって巻き込まれる。恐らくベックマンの小言を回避するためなのだろう。なんとか話題を剃らそうとまくし立てるように喋る姿はなんとも情けない。

「成る程。たしかにお頭のせいでリオンに被害がいくのはかわいそうだ」

だがベックマンにはそんなシャンクスの思惑などお見通しなのか、もとより逃す気などないのか。個人的には後者のような気がする。

「なら、続きは食堂で、ゆっっくりするとしようか」

ゆっくりを強調して逃げ道を塞ぐ姿に、手慣れているなと感じたリオンは心の中でいつもお疲れ様ですと呟いた。

??????????

今朝のことを振り替えるようにヤソップに話すと、彼は呆れたような表情で私の頭に手を置く。

「そりゃ朝から災難だったな。あんだけ絞られてりゃしばらくは大丈夫だろ」

「はい。でも、しばらく？」

「あぁ、しばらくだな。少し経つとすぐやらかして副船長に怒られて、の繰返しだな」

軽くかき混ぜられるように撫でられて髪がぐしゃぐしゃになる。

労ってくれたんだろうけど、女の子の頭をそんなふうに撫でないでほしい。

「もう、髪の毛ボサボサになっちゃうから止めてください。でも、なるほどそれでシャンクスが怒られてる姿は頻繁に見られるわけだ」

「おぉそりゃ悪かった。ま、そういうことだ。またなんか困ったことがあれば相談くらいには付き合ってやる」

「？」

「世話を任されたって言ってただろ。お頭が決めて、副船長が認めたならリオンはもうこの海賊団の仲間だからな。何かあったら助けてやるよ。その原因がお頭でもな」

「そうだな。あのばか頭（がしら）がなんかやらかしたら報告してくれ。あほなことをしてるようなら殴ってかまわん。リオンのことは気に入ってるようだしお頭も多少は懲りるだろ」

するりと会話に参加してきた人物にぎょっとする。思わず後ろを見ると、シャンクスが正座してこちら（というかリオンの隣の人物）を恨めしげに睨んでいる。いつの間にか説教は終了していたようだ。睨まれているご本人は特に気にした様子もなく、椅子に座り優雅にコーヒーを飲んでいる。

何故シャンクスが大人しく正座したままなのかは聞かないでおこう。この船でお世話になると決めた初日から、これ以上シャンクスの株を下げる必要もない。たとえ、それがいつか落ちるものだとしても。

・・・うん。深く考えちゃダメなやつだな。これは。

「食べ終わったか？」

「あっ、はい！ごちそうさまでした」

少々失礼なことを考えていた為反応が遅れた。しかし、余計なことを考えていても手と口は休まず動かしていたし、元々ヤソップと話だ

したあたりでほとんど食べ終わっていたのでお皿の上は綺麗になくなっている。
ベックマンはリオンの言葉にひとつ頷くと、席を立ち片付いたばかりの皿を片手にスタスタと厨房の方へ向かって行ってしまった。
副船長に後片付けしてもらうなんて、なんだか申し訳ない。先程のヤソップといい、ベックマンといい、昨晩のシャンクスといい、この船にはイケメンしかいないのだろうか、顔もそうだが行動がいちいちかっこいい。元々ワンピースの世界には男気に溢れたイケメンだらけだったがこの世界にやって来た次の日からそんなことを実感することになるとは・・・。

何やらコックたちと話しているベックマンを眺めつつ、この後どうすればいいのかなーと思考を切り替える。

まずは自分の身体のスペックが知りたいな。元の身体と違いすぎて何が出来るのか出来ないのか、その判断がつかん。
問題はそれをどうやって確めるか、だ。リオン一人では判断しずらい。となると他の人に稽古をつけてもらうなりするのが妥当なのだが、頼めそうなシャンクスやベックマンあたりは他にやることがありそうだし却下。ヤソップあたりに相談しつつ誰か紹介とかしてもらおうかな。
ある程度の予定が固まったところで、腕をあげて身体を伸ばす。昨日から感じていたけれど、今朝も探るような視線がぶすぶすと刺さるようで、身体が強ばっているような感覚をぬぐい去りたかったからだ。特に害意みたいなのはないみたいなんだけど、なんとも居心地が悪い。
まぁ、多少はしょうがないかな。海賊船にこんな子供がいたら不審に思うのは当たり前だろう。あーでも白ひげとかなら違和感ないかな？実際どうなるかは別にして、気に入られたら豪快に笑って色々許してくれそう・・・いや、なんかマルコが反対しそうだな。それにここより人数多いから嫌がる人もたくさん居そう―。

視線を感じるからといって現状どうすることも出来ないのだ。これからのことを考えると言えば聞こえは良いかも知れないが、ようは現実逃避だ。まぁ、他人を気にしていたら何も出来ないので、さっそくヤソップに聞いてみようかな。できたら訓練とかに混ぜてもらえないかな。あるか分からないけど―

ブワッ

時々脱線しつつも思考をまとめていると、突然、背筋が粟立つような感覚に襲われる。それは命の危機を知らせるようなものではなかったのだが、身体中を舐めまわされるような気持ちの悪い感覚に気付けば体は反射的に動いていた。

ここが何処かということも忘れて、その場から飛び退き視線を感じた方向から距離をとりつつ、相手を探るように感覚を鋭くさせていく。机を飛び越え、床に着地すると同時に体はすぐにでも動くことができるよう、半身の構えをとる。

ガタンという音をたてて倒れる椅子と、突如飛び退き臨戦態勢に入るリオンに周囲の視線が一斉に突き刺さる。こちらがどう動いてもすぐに対処できるように構えをとる船員たちに、ガヤガヤと騒がしかった場が静まり返り、視界の中心にいるシャンクスの姿を見て、今自分が何処に居るのか思いだしたリオンは先程の視線の主を探すことを忘れて固まる。

「・・・あー。・・・・その、どうしたんだ?」

沈黙に堪えられなかったのか、それとも別に理由でもあるのか、恐る恐るリオンに声をかけてきたのはシャンクスだった。

どうしようかと行動に困っていたので、声をかけてくるたのは助かった。ばか正直に気持ち悪い視線を感じたので、と言う訳にはいかないので少しぼかして伝え頭を下げる。

「なんか変な感覚がした気がして思わず過剰に反応しちゃったみたいです。・・・ごめんなさい」
「おいそれ」

先程まで探るような、疑うような視線に嫌な空気に満ちていた食堂が、別の意味で静まりかえるのを感じて、内心首をかしげてる。

「・・・お頭」
「お頭が原因じゃね？」
「なにやってんだよお頭」ｅｔｃ．

声をかけてくれたシャンクスが何か言うまで頭を下げてようと思っていたリオンは、なにやらシャンクスを責め始めた周りの声に思わず顔を上げる。
先程までリオンに突き刺さっていた視線は、この船の船長に向けられていた。状況をいまいち理解しきれないが、何やら誤解が発生しているような気がする。なんとかしようと声をあげる前に頭にのせられた手と、リオンをシャンクスから庇うように前に出てきたヤソップに事が尋常ではないことを感じる。
昨日やって来たばかりの得たいの知れない子供を警戒するのは当たり前だ。それでも船の船長が連れてきて、副船長が船に乗ることを認めたのだからある程度の通達ぐらいはされているだろう。昨日、今日と様々な視線を感じたが明確に敵意のようなものを感じたことはなかった。それが、先程リオンが警戒体制をとったことでまわりの船員が警戒心をもつまでは分かる。明らかにこちらに非があるからこそ頭を下げ謝罪をしたのだが、何故そこでシャンクスを非難する流れになるのだろうか。
私を背に庇うヤソップも、ゆらりとシャンクスに向かって歩くベックマンも、食堂に居る人達のほとんどがゴミでも見るような目でシャンクスを見ているこの状況は、何かがおかしい。

「ま、待て！落ち着けお前ら!!特にベック！そんな恐ろしい顔で近づいてくるなっっ！話せば分かる!!」
「最後の言葉はそれでいいのか、お頭」
「流石にこれはお頭のこと庇えきれねぇな。ついでに今後同じことをしないよう、しっっっかり反省させとかないとな」
「あぁ、それは任せろ。俺が言い聞かせておく。こっちのことは頼んだ」
「はいよっと」

口を挟む隙もなく交わされる二人の会話にあっけにとられるが、ベックマンがシャンクスの首根っこを掴み暴れるシャンクスを引きずって扉へ向かっているのを見て慌てて静止をかける。

「ちょっと待ったー!!!」
「どうした？お頭（バカ）にはよく言い聞かせておくから心配しなくていいぞ」
「今回ばかりはお頭が全面的に悪いしな。そのへんは副船長に任せとけ。お前さんはとりあえずその青い顔をどうにかしないとな」
「コックあたりに頼んで温かい飲み物でも貰ってこい」
「ココアとかないか聞いてくるわ」
「え、いや、大丈―って行っちゃった」

???ベックマンｓｉｄｅ???????

俺の提案にすぐさま厨房へ向かうヤソップに口角が上がるのを感じ、急いで空いてる方の手で隠す。ヤソップに続くように何人かついていくやつらがいたが、あいつらはヤソップのように妻子持ちや、普段子供が好きだと言っているやつばかりなのでこれを足掛かりに仲

良くなるためにリオンと会話でもしたいのだろう。
俺の前でリオンがお頭は悪くないので放してほしいといった内容を話しているが、これに関しては半分ほど牽制の意味もあり、先程のことについて話し合うことが出来たのは本当なのでヤソップのヤツが戻ってきたら適当に煙に巻いてうやむやにしてしまおう。
リオンはこの年頃の子供にしては大人びた思考をしているようだが、考えていることが顔に出やすい。自分が悪いと思っているのが顔に書いてあるようだが、今回は別に切っ掛けがあったように思う。同じように感じているのは幹部たちと他数名程度だろう。他のやつらはお頭が全面的に悪いと思っているのだろうが、直前までの行動と普段の行いの悪さが原因なので俺からフォローしてやることは特にない。これで懲りてくれれば俺の仕事が減るんだが—あまり期待しないでおこう。

リオンが突然動き出す前、俺がコックたちに今晩の予定を伝えた後リオンのところへ戻ろうと踵を返したときに、お頭がリオンの背後から近づいているのが見えた。態々気配を消してゆっくりと忍び寄る姿に、説教が足りなかったか、とため息をつく。
距離的にもお頭の方がリオンにちょっかいをかける方がはやそうなので殴って止めるかと、歩みを進めていたとき、前触れもなくリオンの顔色が一瞬で真っ青に変わる。
あまりの顔色の悪さに隣にいたヤソップが声をかけようとしているのが見えたが、それよりもはやくリオンがその場から飛び退くと、直ぐ様構えをとるその姿はナニかに怯えているようにも見えた。
そう感じたのは俺だけではないのだろう。食堂にいたやつらのほとんどが心配するようにリオンを見ていた。他にも声をかけたいが、そのせいで自分が怖がられたらどうしようかと考えて機会を伺っているものもいて、がたいのいい男どもが一人の少女に右往左往している姿は中々に気持ち悪かった。
結局、真っ先に声をかけたお頭によって、リオンが真っ青になった

原因がおかしな気配を感じたことと判明する。それを聞き、食堂にいたもののほとんどの脳内で、直前まで背後でニヤニヤしていたお頭の存在とその気配が＝（イコール）で結ばれるのも仕方ないことだろう。

只、リオンの顔色が変わるまで前触れらしきものが全くなかったことが気になる。確かに背後から近づくお頭の存在が原因と考えるのが妥当なのだろうが、それにしては顔色の変化が急すぎる。それにリオンが構えをとったあとも、ナニかを探すように視線をさ迷わせていたこともお頭が原因ではないと考えられる可能性に拍車をかける。明らかにリオンの視線はお頭を素通りして別のモノを探していた。

湯気をたてるコップをリオンに持たせようとしているヤソップや、どこから持ってきたのか飴やらチョコやらを押し付けている仲間たちに押しきられているリオンはこちらのことを気にかけるている余裕はなさそうだ。

お頭は、ことの次第を見守っていた幹部数名と視線を交わし、リオンに気付かれないよう食堂の外へ向かう。俺もお頭に指名されたやつらと一緒にお頭についていく。何も指示も出していないのに、俺たちの姿を隠すようにリオンの周囲に集まって騒ぐやつらに対して、感謝と飽きれが半分半分の念を送りながら食堂を後にした。